

私が「——」になった日。

葉方萌生 Mei Hakata



アルファポリス文庫

目次

プロローグ	5
第一章 ヒーローになった日	7
第二章 きみを失いそうになった日	50
第三章 きみに好きだと言われた日	110
第四章 闘うことを誓い合った日	141
第五章 決意が生まれた日	204
第六章 最期の願いを聞いた日	238
エピローグ	276

からりと晴れた空を、いつもより近くに感じていた冬の日。ジャングルジムのてっぺんにいた私の頭上を見慣れない鳥が通り、髪の毛をかすめた。バランスを崩し、心臓が止まりそうになる。無理に踏ん張った足にびきりと衝撃が走り、顔をしかめた。

「かえで、助けてー！」

思わず、下でリフティングをしていた楓かえでの名前を呼ぶ。

少し離れたところで遊んでいた私の妹の柚葉ゆずはと、楓の妹の椿つばきちゃんが、視界の端でこちらを振り返ったのが分かった。

「どうした朝葉あさは！」

「あ、足が、動かなくて」

「足？ 分かった、すぐ行く！」

私の危機を察してくれたのか、リフティングをやめた楓が、タタタッとジャングルジムを登ってきた。私の隣までやってきて、手を伸ばす。

プロローグ

「つかまって。一緒に降りよう」

「う、うん……ありがとう」

私の手より少しだけ大きくて硬い手を握ると、不安だった心が安堵に包まれる。足は痛かったけれど、楓に支えられてなんとか下までたどり着いた。

「は、怖かった。ありがとう、楓」

「無茶すんなよ。大丈夫か？」

「たぶん、ちよつと捻^{ひね}っただけだから、大丈夫だと思う」

「そうか。家帰ったらちゃんと冷やせよ」

私の頭に手を乗せて、愛犬を愛でるみたいにわしゃわしゃと撫でる楓。そんな楓の前で顔を真っ赤にしながら思う。

ヒーロー、みたいだな……

小学四年生、男の子と二人で遊ぶのがちよつとずつ恥ずかしくなってくる年頃。繫いだ楓の手のひらはとても温かく、この先もずっと握っていたいと思った。

そんなこと、絶対に口に出すことなんてできなかったけれど。

高校二年生になった今でも、楓は私のヒーローだった。

第一章 ヒーローになった日

パッパカパッパッパーン！

クラッカーのような音と、誰かが拍手をする音、そして「パッパカ」と誰かが口ずさむ声が脳内に響く。誕生日会？ それともクリスマス会？ 記憶のどこを探しても、私がパーティーに参加する予定はない。そもそもパーティーなんて、たまに運動部の人たちがしているのを見るくらいだ。

日頃教室でおしゃべりをするか、本を読むくらいしかない私には縁がない。それじゃ、この音は何なんだろう？

真っ暗だから、一瞬目を瞑^{つぶ}っているのかと思った。でも、どんなに目を開けようとしても開いている感じがしない。ということは、元から目を開けていたのだろうか。それにしても暗すぎる。夜なのだろうか。

それともこれは夢？

夢と言われるほうがしっくりくる。前が見えないほどの真っ暗な時間帯に、不可解な音が聞こえてくるのはおかしいもの。

私は息を潜めた。

そのとき、遠くで何かがピカッと光ったような気がした。

たとえるなら、長いトンネルの先に、外の光がようやく見えたみたいに。

「おめでとうございます！ あなたは、〃神様〃に選ばれました」

「……はい？」

状況はよく分からないけれど、脳内に響いてきた声に返事をすることはできた。その声は特殊な加工が施されているかのようで違和感を覚える。

神様に選ばれた？ どういうこと？

理解がまったく追いつかなくて、ああそうかこれはやっぱり夢なんだと逆に落ち着いた。

「だーかーらー、あなたは——如月朝葉は〃神様〃に選ばれたんだって」

女の子のような口調の明るいその声は、私の心を置いてけぼりにする。

「神様って何？ これって夢だよね」

「夢と思うのなら、そう思ってくれても構わないけれど、でも〃神様〃に選ばれたのは疑いのような事実だよ。百億分の一の確率で、如月朝葉さんは見事〃神様〃に当選しました！ 本当におめでとう〜」

もし目の前にこの声の主が現れたなら、少女(?)はキラキラとしたまなざしを私

に向けているんだろうな。それぐらい、はっ澁刺とした元気な声だった。どこかで聞いたことがある話し方のようにも感じる。でも、どこで聞いたのか、思い出せない。

「今ね、外は雪が降ってる。牡丹雪はたんゆき。朝葉は雪の中で目を覚ますの」

「雪の中？」

「うん。覚えてないの？ 朝葉、昨日の夕方に事故に遭ったこと」

「事故……」

少女の声に誘われるようにして、記憶の海にザザッとさざなみが立つ。

そういえば、そうだ。

昨日は日曜日だった。

私は、幼馴染の男の子、若宮楓わかみやと一緒に雪の降る街を歩いていた。私たちの暮らしている函館市では毎年だいたい十一月の中旬から中旬に初雪が降る。十一月九日の昨日も、例年通り今年初めての雪が降った。

楓に、期末テスト前の息抜きがてら、出かけようと言われたのは事件が起きる三日前のこと。二人で休みの日に出かけたのは久しぶりで、私は彼に悟られない程度に、心が浮き立っていた。

以前から気になっていた映画を見て、カフェで大人ぶってブラックコーヒーを飲ん

だ。苦味に耐えられなくなった楓は「ギブアップ!」と言って砂糖とミルクを一気にカップに流し込む。私は笑いながら「そんなに入れたらカフェオレになっちゃうよ」とつつこんだ。「いいんだよ。やっぱりお子さまの俺にはカフェオレのほうが似合うって」と、楓は子どもみたいに無邪気に歯を見せて笑っていた。

「テストが終わったらすぐクリスマスケーキトーカー」と言った彼の横顔はどこか嬉しそうで。私も、今年も楓と一緒にクリスマスケーキトナーに行けるんだと楽しみになった。

でも、悲劇は帰り道で起きてしまった……

カフェでゆつくりと過ごしたあと、夕飯前には着きたいと家路を急ぐ。

だけどその前に、私はどうしても行きたい店があった。

カフェから徒歩十五分ほどの距離にあるケーキ屋さんだ。

昨日は二つ下の妹の柚葉の誕生日だった。

中三で受験生だから「ケーキはいいよ」ってつつけんどんに言い放っていた妹。だが、本当はそれが痩せ我慢だって知っていた。だから私はお母さんと相談して柚葉のケーキを買いに行くことになっていたのだ。

その道中のことだった。

交差点で信号が青になろうとしていた。

近くで一緒に信号を待っていた二歳くらいの小さな女の子が、「お腹が空いた」と駄々をこねて、隣にいるお母さんが辟易へきぎょくしているのを見た。楓がその女の子に声をかけようと足を進めた。しかし、不幸なことに左折してきた車が不自然にタイヤを滑らせる。運転手の焦ったような顔が、私の視界の端に映った。

「危ないっ!」

咄嗟とつさに女の子を守ろうと飛び出した私と楓。

女の子の身体を包み込んだのは楓のほうだった。

ヘッドライトに照らされた私の身体を、ゴンツ、という鈍い衝撃が貫いたかと思うと、そのまま地面に打ちつけられた。その後、すぐに意識が途切れたのか、何も思い出せない……

「もしかして私、死んだの……?」

自分の脳内に響いた声がわずかに震えていた。

「はい、残念ながら」

女の子の声が明るいからか、余計に残酷な色を帯びているように感じられた。

「嘘……嘘だ。死んだなんて、そんな……」

ひどい悪寒がして絶句する。真っ暗な深い穴に突き落とされたかのような絶望感に、

息が止まりかけた。実際にはもう息なんてしていないのかもしれないけれど、それぐらい、強烈な恐怖が私を容赦なく襲った。

「……嘘じゃ、ありません」

そう言った彼女の声が、含み笑いに変わる。なんだろう。今、最初にちょっと間があったような。「嘘じゃない」と言うときに、本心とは別の発言をしているような揺らぎを感じた。

けれど、そんな些細なことに構っている場合ではなかった。

「本当に……死んだんだ。……でもそれなら雪の中で目を覚ますってどういうこと？」
本当は今すぐにも泣き叫びたかった。受け入れたくない。受け入れてはいないけれど、不可解な声と話していると、自然と自分が本当に死んだのではないかと信じ込まされた。

「それを今から説明しようと思って！ あのね、さっきも言ったけどあなたは今日から神様になります。神様として、現世に現れることのできる能力が与えられました。でもその能力を使うのには条件があつて。それが、『雪の降る日だけ、現世に姿を現すことができる』というものです！ あともう一つ、現世で朝葉の姿が見えるのは、『一ヶ月以内に命を落とす人』だけです」

「えっと……ちよっと待って」

いろいろと話が非現実的すぎて、やっぱり理解が追いつかない。

脳内の「声」が次の言葉を発する前に、なんとか今言われたことを頭の中で整理してみた。

- 一、私は昨日の交通事故で死んでいて、神様〴〵に選ばれた
- 二、神様は雪の降る日にだけ、現世に姿を現すことができる
- 三、私の姿が見えるのは、一ヶ月以内に命を落とす人だけ

……うん。なんとなく話は分かった。けれど、神様〴〵に選ばれて現世に行くことに何の意味があるのかは分からない。それに、一ヶ月以内に命を落とす人と会って、何をしたらいいの？ その人はもうすぐ死んでしまうの？ 神様〴〵っていったい何なの——

聞きたいことは山ほどあつた。だけどその中でも一番気になっていることを尋ねる。

「あなたは誰？」

「わたし？ わたしはねえ、八十神さんやそがみって呼ばれてるよ」

聞き慣れない単語に、私は面食らう。

「八十神？ 神話とかに出てくる神様？」

「うん、たぶんそう。わたしもよく分かってないのー。みんながそう呼ぶだけだから、あんまり深く考えないで。とにかくわたしもあなたと同じ神様」

「はあ」

彼女が言う「みんな」というのはいったい誰のことだろうか。神様たち？ 彼女以外にもいろんな神様がいて、その他の神様たちが彼女のことを八十神さんと呼んでいる……という解釈でいいんだろうか。

「あ、もし嫌だったら今のうちに言ってみてね？ 現世に留まりたくない、今すぐ成仏したいって思ってるなら、別の人を当選させるから」

「当選……。神様になる人をまた選び直すってこと？」

「そう。だって死んだ人間が現世に戻りたいって願うのは普通じゃない？ 好きで死んだ人以外、生きたいと願う人はいくらでもいる。だからもしあなたが「神様」として現世と繋がれることを望まないなら、もつと他に、切実に現世に戻りたいと思ってる人を選ぶから」

「……そっか」

そこまでの話を聞いて、私の中で強い気持ちが芽生えるのを感じた。死にたくない。

誰もが当たり前前に持っている感情が、ようやくひゅつと湧き上がってきたのだ。

私はまだ十七歳の高校二年生で、やり残したことは山ほどある。

立派な将来の夢なんてないけれど、ほんやりと学校の先生になりたいと思っていた。美味しいご飯だったたくさん食べたいし、綺麗な景色だっけ見てみたい。

それに……

「楓……」

一番心残りなのは、一緒に事故に遭った楓のことだ。

保育園時代からの幼馴染で、ずっと私の——大切な人。

あのとき……私たちが事故に遭う前に、雪の中で笑い合ったことは記憶に新しい。映画館からカフェに行く間、函館の街に今年初めての雪が降って、私は久しぶりの雪を両手で受け止めた。ちゃんと手袋をはめていたから、冷たくはなかった。

『朝葉、何してんだ？』

『何って、初雪観察だよ』

『雪なんて毎年嫌というほど降ってるじゃねえか』

『えーでもさ、やっぱり初雪ってちょっとわくわくするよ。それに、見慣れてるからこそ、じつと見ないと気づかないこともあるし』

『ふうん、そんなもんかあ？ で、見慣れた雪を見て、何か気づいた？』

楓が擲揄うように私の顔を覗き込む。ぐっと縮んだ距離に、心臓がどくと跳ねた。

『……黒い手袋してるから、雪の結晶が、綺麗に見えるよ』
ほら、と楓に手のひらを差し出した。黒い手袋に張りついた雪は、目を凝らしてみるとイラストで描いたような六角形の結晶をしていた。

『うわー本当だ！ すげえ！ 俺、雪の結晶をちゃんと見たの、初めてかも』
『やっぱり？ 身近にありすぎると見えないものだよ』

楓が驚いてくれて、調子に乗った私は得意げに胸を反らす。

『そっかあ。雪ってよく見たらこんなに綺麗なんだな。気づかなかった。教えてくれてありがとな！』

無邪気に笑う楓の顔がまぶしくて、思わずそっと目を逸らした。けれど、本当はいつまでだって、その笑顔を見つめていたかったんだ。

それなのに……私が、死んでしまったなんて……

「ねえ、楓は、若宮楓は無事なの？」

八十神さんに聞いて分かることではないかもしれないが、どうしても気になった。すると暗闇の中で、八十神さんがふっと軽く息を吐いたのが分かった。

「……ああ、若宮楓くんね。苦いコーヒーが苦手で、ブラックコーヒーに砂糖とミルクを大量に入れちゃう彼ね。楓なら大丈夫。なんとか軽傷で済んだみたいだよ」

ブラックコーヒーに砂糖とミルクを大量に入れるなんて、そんなことをどうして

八十神さんが知ってるんだろうかと疑問に思ったけれど、神様なら下界にいる私たちのことはすべてお見通しなのかもしれない。

「良かった……」

とりあえず、楓が無事だと聞いて安心する。

「で、どうするの？ 神様様になつてみる？ ちなみに、雪の日に現世に行くことができるだけだからね。会いたい人に会えるとか、いつでも現世に行けるとか、そういう魔法みたいな力ではないよ。現世に行くのって、そんなに簡単じゃないから」

「うん、さつき教えてもらった条件の通りだよな？ 遠くからでもいい。楓のこと、遠くからでも眺められるならそれで。最後に一目だけでも……楓に会いたい」

「了解です！ それなら、他の人を当選させるのはなしにするね。あ、一つだけ、言っておかなくちゃいけないことがあったんだ！」

八十神さんは、「今、思い出した」とでも言うように、声を上げる。

「言っておかなくちゃいけないことって何？」

「それはですね、朝葉には現世で一つ、使命があるってこと」

「使命？」

さつきの「神様」としての条件を聞いただけでも頭が混乱しているのに、今度は「使命がある」だなんて、八十神さんってもしかしてDS？

「そうそう。ただ現世に行って会いたい人に会える、だけじゃつまらないでしょ？」
八十神さんの口調はいたずらっ子のそれだった。

「つまらないって……」

死後の世界で「楽しい」とか「つまらない」とか、そんな俗世間的な感情で行動をしても良いのだろうか。

「勘違いしないでよね。死んだあとで現世に行けるっていうのに、何もミッションがないなんて都合の良いことはないってこと」

今度は真面目な口調でさらりとやってのける。

八十神さんの言うことにも一理あるとは思う。ただ私が会いたい人を眺められるだけ——そんな都合の良いことが自分の身に起こるなんて、ないわけだ。

「……分かった。で、その使命は何なの？」

「え、それはさすがに教えなない」

「は？」

からからと私の質問を嘲るように笑う八十神さんに、だんだんと腹が立ってきた。

だが、ここで本気で怒ったって仕方がない。私はもう死んでいて、八十神さんが「神様」としての力をくれるのは事実のようだし……

「使命が何なのかは、朝葉が自分で考えて、答えを見つけて」

いたずらっこのような口調から一転して、今度は真面目なトーンで言う。切実さを孕む彼女の言葉に、私は「分かった」と答えざるを得なかった。

「じゃあ、如月朝葉、早速あなたに「神様」の力を与えまーす！」

八十神さんが声高らかにそう言うのと、私の全身がまばゆい光に包まれていくような気がした。自分の肉体の感覚がないから、暗闇から一気に真っ白になったように感じただけだけれど。

それから「頑張っつてね」という八十神さんの無邪気なエールとともに、私の意識はふっと途切れた。

アスファルトの上に舞い落ちる、かき氷みたいなふわふわの雪。橙色の光の筋が解けゆく雪を照らして残滓を見せる。何度も、何度も、たくさんの雪が煌めきを見せた。やがて雪は積もり、日の光を浴びても解けなくなった。

そのとき、ぐにやりと世界が歪んだ。

今まで、地上よりもずっと高い場所でふわふわと浮いていた感覚があったが、急に体が重くなった気がして、現世に降り立つのだと分かった。そのとき、視界がぶれて、

目の前の景色が二つに分かれたように見えた。私は目がおかしくなったのかもなんて思っ、目を閉じた。

「……っ」

しばらくして再び目を開けると、さざなみの音の中で、真っ白な地面が目飛び込んできた。右の頬だけがひんやりと冷たく、慌てて横になっていた身体をガバッと起こす。倒れていたのは砂浜の上だった。とは言え、雪が降る今、砂浜は一面、真っ白に染まり、その先に広がる海は半分くらい凍っている。時折、雲の切れ間から差し込む太陽の光が、鈍色の海を黄金色に染めていた。ゆらゆらと揺れる水面をぼうっと眺めていると、次第に自分が置かれている状況が分かってきた。

雪の降る日だ。

八十神さんから言われた通り、ぱらぱらと粉雪が降っていた。

両手に視線を落として、グーパー、と繰り返し握ってみる。

「ちゃんと、動く」

手を握りしめる感覚は生きていたころと変わらなくて、頭が混乱した。

神様になったら現世に行くことができるって聞いたけど、普通に生きていたときと同じように身体を動かせるんだな。

自分が死んでいるだなんて思えないくらい、感覚は生身の人間と同じだった。

「本当は死んでなかったりして」

不意に頭をよぎった考えを、無理矢理振り払う。あの事故が全部夢で、さっきまで八十神さんと話していたことも妄想だったらしいのに。そう思ってしまうのも仕方がない。だってこんなふうには、死んだあとに何事もなかったかのように現世に降りてくることができるなら、生きているのと変わりがないもの。

そう思いながら、砂浜から出るべく、道のほうへと歩いていく。景色から察するに、おそらくここは函館市の隣にある海水浴場だろう。夏になると海水浴に来た多くの人で賑わうけれど、雪の日の今日はさすがにひと気がなかった。函館の冬らしい静けさが横たわるばかりだ。

そういえば昔、ここで楓と雪だるまをつくったっけ。雪が積もる冬の砂浜で、楓と楓の妹の椿ちゃんと、私の妹の柚葉の四人で遊んだ記憶が鮮明に蘇る。

『楓、いくよー!』

『おわっ!』

思いつきり投げた雪玉が楓の顔面に直撃してしまい、ものすごく心配した。

『わ、大丈夫!』

慌てて楓の元に駆け寄ると、彼が雪の上でひっくり返って鼻を真っ赤に染めていた。

『大丈夫……!』

その後、高校二年生になった今に至るまで、私は楓に想いを伝えていない。「伝えないうまま、死んじやったんだ」

もう保険をかけることも、予防線を張ることもできない。楓が好きと伝えられない。

今頃になって襲いくる猛烈な後悔が、この世からすでにいなくなっているはずの私の胸を締め上げる。

「この気持ちも、雪と一緒に解けてしまえばいいのに」

アンニュイな気分浸りながら、雪が積もりゆく歩道を歩く。ザ、ザ、という雪の上を歩くときの独特な音は生まれたころからずっと耳に馴染みのある響きだ。そして、冬の凍てつくような寒さは日常の延長線上にあるもの。雪も、例外ではなかった。

無心で海岸沿いを歩いていると、気がつけば明かりの灯る函館駅に着いていた。幽体だというのに足はしっかりと疲れるんだなあ、なんて呑気に考える。たぶん時間にして一時間半くらいは歩いている。

目が覚めたときは陽の光からして夕方かと思ったが、違っていた。

朝だ。あの海で見たのは朝焼けの光だった。

歩いているうちに気温が少しずつ上がっていったのが分かったし、空は少しずつ明るくなっていった。

『函館駅』という看板を見上げながら、違和感に気づく。

「あんなところに時計なんてあつたっけ？」

看板のすぐ下の壁に、青色の大きな時計が見えた。私が生きていたころには見たことがない。前に函館駅に来たのはいつだっただろうか。それほど前ではないと思っていたが、最後に来たとき以降に設置されたのかもしれない。

時計は八時過ぎを示している。

駅の前で真ん前で時間を確認したまでにはいいものの、その後途方に暮れた。

八十神さんの言う使命とやらが分からない今、私の目的は楓に会うことだけだ。

ううん、*うん*、*ん*じゃない。

楓の姿を一目見ることに。

少なくとも楓が無事で、元気に過ごしていることを確認できれば、自分が死んだことにも整理がつけられるだろう。楓に気持ちを伝えられなかった後悔を抱えたままになつてしまふけれど……。でも少なくとも、突然離れることになった彼に、ひそかにでも自分の中で気持ちの区切りだつてつけられる。

そう思って、とにかく彼がいるはずの函館市まで歩いてきたんだけど……
今が何月何日なのか分からないんだよなあ。

平日なのか、休日なのか。楓はどこにいるのか。

病院？ 家？ 学校？

それが分からなければ、彼の姿を確認しに行くことも難しいわ。

駅構内ならばどこかに日付が分かる掲示板のようなものがあるかも、と思い、駅の入り口へと進んでいく。そのときだった。

「お姉ちゃん、寒くないの？」

五歳くらいの男の子が、私をすぐそばからじつと見上げていた。「わわっ」と声を上げて、二、三步後ずさる。

急に声をかけられてびっくりしたー！

……じゃなくて、え、私のことが見えるの!?

驚いて彼の目を見つめる。濁りのない瞳に映る自分の目が大きく見開かれていた。

「……きみ、私のことが見えるの？」

「ええっ？ うん、見える」

「そ、そうなんだー……。へえ」

何を聞かれたのか分からない、というふういきよとんと立ち尽くしている少年。現

世に来てから誰かに声をかけられたのが初めてだった私は、胸がドキドキと高鳴るのを感じた。

「ねえ、お姉ちゃんやっぱり寒そう。ぼくのコート、あげよっか？」

「ん？」

少年に言われてはたと気づく。函館では十一月下旬になれば零度を下回ることもある。しかし、今の私は秋仕様の薄いコート一枚しか羽織っていなかった。

あの日——楓とお出かけして事故に遭った日の服装そのままだ。

事故に遭った十一月九日以降ならば、八度から十度くらいの気温なのかもしれない。薄手のコートでは確かに寒いはずなのだが、神様の身体では生身の身体とは気温の感じ方が違うのか、震えるほどではなかった。

それにしても、「ぼくのコートあげよっか」だって。ませた少年だなあ、なんて感心したが、呑気なことを考えている場合じゃないと思っ直す。

いったいなぜこの子は私の姿が見えるのか？

考え得る可能性は一つ。そう、彼が『一ヶ月以内に命を落とす人』だからだ。

八十神さんから言われた「条件」がぐるぐると頭の中を駆け巡る。目の前に立っている、どう見ても健康そうな少年を見てなんとも言えない気分が襲われる。

こんなに小さい子が、一ヶ月と経たずに亡くなってしまうの……??

信じられない。

「というか、八十神さんの言っていた『条件』が本当なのか、まだ検証できていない。彼が本当にこの世からもうすぐ消えてなくなる確証はないじゃないか。」

「お姉ちゃんどうしたの？」

深く考え込んでしまつて沈黙していると、少年が訝しげに私の顔を覗き込んだ。

「……ああ、ごめん。寒くないから、大丈夫だよ。ありがとうね」

なんとか頬を緩めてにっこりと微笑んでみせた。

けれど、もし本当にこの子がもうすぐ死んでしまったら、どんな気持ちになるだろうかと想像する。たつた今出会つたばかりの、赤の他人であることは間違いない。でもやっぱり、幼い命が失われることに、心が動かないはずがなかった。

「そっかー、ざんねん」

肩を落としている彼のことを不思議に思う私。

「残念？ 何が？」

「きのうね、アニメで見たんだ。『困ってる人を助けてあげたらヒーローになれる』って。だからぼく、お姉ちゃんにコートをあげたらヒーローになれるんじゃないかって思ったんだ。けどあげられなかったから、なれない」

そのあまりにも純真無垢な理由を聞いて、私の目は点になった。

ヒーローになりたくて私に声をかけてきたの？

なんて可愛らしい子なんだ。

そう思うのと同時に、「ヒーロー」という響きを聞いて、頭の中に楓の明るい笑顔が浮かんで切なさがかみ上げた。

「そっかあ、ヒーローになりたいんだね。大丈夫だよ。私に声をかけてくれた時点で、きみはヒーローになれる。自信持つて」

「本当に？ ぼく、ヒーローになれるの？」

「うん、なれるよ。これからたくさん、困ってる人を助けてあげてね」

「うん！」

ひまわりが咲いたような少年の笑顔が、楓のそれと重なる。

「あ、そういえばさ。僕、お名前はなんていうの？」

「やまかわたける」

「たけるくんか。お父さんとお母さんは？」

さつきからずっと気になっていたことだ。まだ小学校にも上がっていないような子どもなのに、たけるくんのそばには両親らしき人がいなかった。

「駅の中で迷子になつちやつたの。そしたら、お姉ちゃんのことを見つけて」

「え、そうだったの？」

「でね……ぼく」

たけるくんが、どこか言いにくそうな表情でもじもじと身体を揺らす。どうしたんだろうと彼の次の言葉を待っていると、彼は「けんかしちゃったんだ」としゅんとした様子で続けた。

「喧嘩？ お父さんとお母さん？」

「うん……。駅でね、かっこいい新幹線のおもちゃを見つけて。ぼくが『ほしい』って言ったら、お母さんが『おうちにたくさんあるからまた今度ね』って。だけどぼく、やっぱり新幹線がほしくて……」

「ああ、なるほど。そういうことか」

「……そしたら、お母さんとお父さんが『じゃあもう連れていかないよ』って怒っちゃって……。それでぼくも『お母さんとお父さんなんてきらい！』って走っていたら、一人になつて……」

子どもらしい駄々のこね方だ。私も、昔同じようなことをしてお母さんを困らせたことがあるから、気持ちはすごくよく分かる。

「そっか。たけるくんはどうしたいの？」

たけるくんが小首を傾げる。

「どうしたいって……？」

「えっと、ほら、後悔しているから謝りたいとか」

「こうかい……？」

「後悔って言うのは、自分がやってしまったことに対して、悔しかったり悲しかったりすること……かな」

「うん。こうかい、してる」

たけるくんが、ちょこんと頷く。

「私はたけるくんのお父さんとお母さんじゃないから、二人の本当の気持ちは分からないけど、たけるくんのことを想って叱ってくれたんじゃないかな？ だから二人とも怒ってないと思うし、たけるくんのこと、心配してると思うよ」

「心配……ぼくのことを？」

「うん。たけるくんのお父さんとお母さんなら、絶対してると思う。」

だから、一緒にお父さんとお母さん、捜しに行こうか」

私がそう提案すると、彼は納得した様子で「ありがとう」と言って私の手を握った。その行動力にびっくりしつつも、彼の小さな手を握り返す。

久しぶりに触れた誰かの温もりに、心がほっと温かくなった。

二人で駅構内を歩き回ること十五分ほど。

改札の前できよろきよろと辺りを見回しているたけるくんのお父さんとお母さんらしき人を見つけた。

「尊！」

彼の姿を認めた女性が、大きな声でたけるくんを呼ぶ。

「ママ、パパ！」

繋いでいた手を離して、たけるくんがパタパタと両親のほうへ駆けていく。二人に抱きしめられたたけるくんが「パパ、ママ、あのね……」ともじもじと身体を揺らした。

もしかして、喧嘩したときのことを謝ろうとしているのだろうか。

私が見ているからか、たけるくんは両親に本音を切り出しにくそうにしている。私の前ではヒーローらしく見えたけれど、やっぱりまだまだ小さな子どもだ。ママとパパに再会できて良かったね、と心の中でつぶやいてから、そっと身を翻す。

「お姉ちゃん！」

彼らのそばから離れようとしたところで、たけるくんが私のことを呼んだ。

慌てて彼のほうを見ると、たけるくんは満面の笑みを浮かべていた。両親は、「え？」と驚いている。私とはもちろん視線も交わらない。彼らには私のことが見えしていないようだった。

「ありがとう、お姉ちゃん。お姉ちゃんはぼくのヒーローだね！」

「ヒーロー……」

嬉しそうにそう叫ぶ彼に、私はその場でぼつりとつぶやくことしかできなかった。

誰かにそんなふうに言ってもらったのは初めてだった。学校ではいつも、教室の隅で本を読んでいるか、友達と他愛もない話をするだけの私が、ヒーローなんかになれるはずがない。でもたけるくんにとって私がそう見えたなら、これ以上嬉しいことはなかった。

たけるくんの両親は、虚空に向かって話しかける息子のことを訝しく思ったのか「行くわよ」と、彼の手をぐっと引いた。「えー、まだお姉ちゃんとはいばいしてないのに」という不満の声を聞きながら、私も彼らのそばからそっと離れる。

たけるくんがこのあと、両親に喧嘩したときのことをちゃんと謝れますように。

ひっそりと心の中で祈る。

これ以上、あの家族に関わるべきじゃない。

そう思いつつ、遠くまで来てから改札の向こうへと消えていくたけるくんの背中を見送った。

残念ながら、構内で日付を確認することはできなかった。家族連れが多いところを

見るに、平日ではなさそうだ。十二月ならばもっと寒いと思うから、やはり十一月なのかもしれない。

楓は家にいるだろうか。

平日なら学校に向かっていている最中だろうが、休日ならまだ寝ているという可能性も高い。事故の怪我で入院していたら病院にいるかもしれないが、八十神さんによると楓は軽傷らしいし、家にいる確率のほうが高いんじゃないだろうか。

そう考えてから、私の行動は早かった。

楓の家も私の家も、函館駅よりもっと南——夜景で有名な函館山のある方向に位置している。駅から歩くと三十分以上かかるが、あえてバスに乗ることにした。

駅前のバス停から見慣れた函館バスに、わざと扉が閉まっている時に飛び込んでみた。すると身体がするとバスの中に抜けた。

成功だ。

きよろきよろと周りを見回す。どうやら目論みはあたっていたみたいだ。バスの運転手も、他の乗客も不審がる様子はない。つまり、私が普通にバスに乗っても、全く問題ないということだ。空いていた椅子に腰掛けると、歩きすぎた足の疲れが癒えていった。

バスに揺られている時間はほんの十分程度だった。

私や楓の家から一番近いバス停で降りても、冷えた空気は変わらないままだったが、少しだけ雪の勢いが弱まっていた。

バス停から楓の家まで、徒歩十分。坂道があるのでまた少し疲れてしまった。幽体にしては不便な身体だ。

それにしても、八十神さんから言われた使命ってなんだろう？

「使命」というからには神様になった私にしかできないことである気はする。

ただ現世を彷徨^{さまよ}っているだけではヒントも何も得られなくて、途方に暮れてしまう。とにかく今は、楓を一目見られたらそれで……

ただひたすら、楓に会いたいという気持ちが先走る。

上り坂を歩き続けると、やがて住宅地の中に二つの家が現れた。右側の白い屋根の家が我が家——如月家で、左側の黒い屋根の家が楓の家——若宮家だ。

私たちは家がお隣さん同士の幼馴染だった。

二階にある私の部屋の窓から楓の部屋の窓までほんの三メートルほど。私たちはよく、お互いの部屋の窓越しに話をしている。

……いや、していた、のだ。

楓の家に行く前に自分の家の表札をそっと撫でる。「如月」という名字の下に並んでいる、健一^{けんいち}、雪子^{ゆきこ}、朝葉^{あさは}、柚葉^{ゆずは}という家族の名前を見てほっとするような、寂しい

ような心地がした。「朝葉」はもうこの家にはいない。だからと言って、両親がここから私の名前を消すことはないだろう。

本当は自分の家族の様子だって覗いてみたかった。

けれどまだその心の準備ができていない。

私の遺影の前で悲嘆ひたなに暮れる両親や柚葉の顔なんて、見たくないに決まっている。

ひとまず自宅の前を通り過ぎて若宮家のほうへと進んだ。

「あれ、家の前に植木鉢……？」

若宮家の玄関のところに、見慣れない植木鉢があることに気づいた。記憶の中のことを探しても、彼の家の前に植木鉢などなかったような……。枯れた木の枝を見ると、最近置いた感じもしない。夏に花を育てて、枯れたあともそのまま放置しているような感じがした。

不思議に思いながら、玄関のほうをじっと見つめて考えた。

「一階にいるかな？」

もしも休みの日ならダイニングで朝ごはんを食べているかもしれないが、今日が平日だとしたらもう家にはいないだろう。

残念ながら私には自由自在に宙に浮くなどという力はないようで、うまく見えなかった。

地に足をつけて歩くしかない、幽霊のなり損ない。

自分がひどく中途半端な存在に思えた。

一階ならば、裏のほうへと回りさえすれば、窓から少しだけ家の中が見える。そう考えながら楓の家の裏へと歩き出したが、そこで雪が止んだ。

「え？」

雪が止んだ瞬間、動かしていた足がぴたりと止まり、なぜだか私は動けなくなった。「どういうこと？」

混乱しながらもなんとか足を前に出そうと身体に力を込める。けれど、ぴくりともその場から動けなくて。

その瞬間、身体がひゅつと軽くなり浮き上がる感覚がした。

「あ」

飛べる、と一瞬思ったが違った。

まるで、ゲームの世界の住人がテレポートするみたいに、自分の身体がこの世界から遠く離れていくのを感じた。

気がつくと辺りは真っ暗で、まったく違うところにいた。

「雪が止んだら、そりゃこっちに戻ってくるよ、朝葉」
頭の中に響く八十神さんの声に意識がはっと覚醒した。

「雪が降る日だけ現世に行けるって、雪が降っているときだけってことだったんだ……」

「うん、そうだよ。別に嘘なんかついてないからね？ また次に雪が降るときが来るのを待つしかないね」

「嘘なんて、疑ってたわけじゃないけど。てっきり一度雪が降ればその日は一日中いられるのかと思ってたの」

改めて、自分が生きている人間ではなく、現世に留まるのにも条件をつけられた特殊な存在だということを認識させられた。

あと少しで、楓の姿を拝めたかもしれないのに。

残念な気持ち芽生えたが、まだまだチャンスはあるだろう。焦って楓に会いに行く必要はない。

なんとか気持ちをなだめて落ち着かせる。

「そんなに楓に会いたいの？ どうして？」

私の心を見透かしたかのような質問が飛んできて、どきりとする。

「そりゃ、幼馴染だもん……気になるよ」

本当はそれだけじゃない。

私は楓のことが好きだ。

だから彼の様子が気になるのは当然のことじゃないか。

「ふうん。幼馴染ねえ。でもさ、それなら楓にとっても朝葉は大切な人だってことですよ？ そんな人が死んじゃって、すごく落ち込んでるんじゃない？ 朝葉は沈んでいる楓を見て、どうするつもりなの？」

「それは……」

言われてみれば確かにそうだ。

ううん、気づかないふりをしていた。

普段、太陽みたいに明るい笑顔を振りまく楓が、私の死によってひどく落ち込んでいたら嫌だなって、心配していた。だけど、楓が落ち込んでいたなら、私をそれほど大切な存在だと思ってくれていたのだと分かって嬉しく思うかもしれない。

切なさ、喜びが、混ざり合う。

そんな複雑な気持ちになることは間違いない。

けれど、やっぱり私は……

「楓に、会いたい」

彼の姿を一目でいいから見たい。

彼が私のいない世界でも、ちゃんと生きていることを確認したい。

そうでないと、死してなお、自分の中で彼とお別れができなかった後悔を引きずることになるだろう。

神様をやめるのは、そのあとでもいいはずだ。

「そっかー、会いたいんだ。まあその気持ちはだめじゃないと思うけど。朝葉がそこまで気にしてる楓に、わたしも、会ってみたいなあ……って、今のは冗談！ 悲しくなっても知らないよ？」

「……うん、分かってる。ちよつとだけ、彼のことを見守りたいだけだから」

「了解了解。あつ、最初に伝えた使命についてもちゃんと考えてね？」

「分かってる。でもさ、何かヒントとかないの？ 使命って言われても、何がなんだか……」

「ヒントねえ。じゃあ特別に。朝葉の胸の中にあるものを解き放って」

「私の胸の中に……？」

どうも彼女の言うことは抽象的すぎてよく分からない。でもそれ以上聞いても、

きつと教えてくれないのだろう。

「あ、どうやらまた雪の降る日が来そうだよ」

「え、もう？」

八十神さんの言葉に驚く。まだ彼女と数分程度しか会話をしていないのだ。

「ここでの時間の流れ方は現世のとは違うよ。んじゃ、いつてらっしゃーい」

気の抜けた声に送られて、私の身体はまた、ひゅるるると現世へと運ばれていく。自動的に、川上から川下へと水が流れていくように。

そこで再び、意識がぶつりと途切れた。

目を覚ました場所は、楓の家の前だった。

どうやら一度現世から引き離されたあと、再びやってくる前回いた場所からスタートするらしい。とはいえ、まだ一度目のことなので本当にそうなるか定かではないが。

日が落ちかけていて、時刻は夕方だと分かった。

雪はそれほど強くない。この様子だとまたすぐに止んでしまう可能性が高いだろう。

今日も何月何日なのか、分らない。

前回目覚めたときとあまり体感気温が変わらないことから、それほど日が経っているように思えなかった。

「そうだ、楓は」

そつと楓の家の裏へと回り込むと、庭に面した窓のカーテンが少しだけ開いているのが見えた。楓はリビングにはいない。いるのはおばさん——楓のお母さんだけだ。

馴染みのある人物の顔を見て、ほつとする。

私はもうこの世にはいないのに、異国の地で知り合いに会えたような気分になった。リビングを観察すると、ちょうど大きなテレビ画面が視界に入ってきた。おばさんはマグカップを片手にソファに座り、夕方のニュースを見ている。じつと目を凝らすと、テレビ画面の上に「11月25日」「17:15」と表示されていた。

それから、続いて映ったニュースに目が釘付けになる。

『十一月二十二日に、函館駅構内で起きた男児殺害事件についてです。被害者は近所に住む山川尊くん、五歳。両親と札幌行きの電車を待ったためホームにいたところを襲われました。男はその場ですぐに駅員に取り押さえられました。近くにいた人からは、男が急に男の子を刃物で刺すのを見た。一瞬の出来事だった』と証言を得ています——』

「山川、尊くん……」

咄嗟に口から彼の名前が漏れる。

——あ、そういえばさ。僕、お名前はなんていうの？

——やまかわたける。

あどけない口調できちんと名前を覚えてくれた。私のことを、〴〵ヒーローだと言ってくれて。自分もヒーローになりたいんだと笑っていた。まだ小さな男の子だったけれど、どこか頼もしくて。そんなかわいらしいヒーローが、殺された……？

「うえっ……」

突如吐き気が込み上げて、その場でえずく。

世界から急速に色が失われていくかのような感覚に襲われて、思わず胸を押さえた。そんな、馬鹿な。

何の罪もない尊くんが、どうしてこんなことに？

尊くんを襲った男は、いったいどんな理由でそんなことをしたの……？ ニュースではそれ以上の詳細は語られていない。通り魔？ それとも最初から尊くんを狙っていた？

そこまで考えて、はつと息が止まる。

楓も、同じなんだろうか。

ずっと家が隣同士で幼馴染だった私がいなくなつて、楓は今の私以上に、ひどい胸の痛みを抱えて生きているんだろうか。

「はは……」

私は、なんて浅はかだったんだろう。

一歩、二歩、と後ずさる。ニュース映像から目を逸らし、楓の家からも遠ざかった。楓に会えない。

こんな気持ちを抱えたまま、落ち込む楓の姿を見てしまつたら、きっと私は立ち直れなくなるだろう。

さっきのニュースから、今日が十一月二十五日だということが分かった。私が死んだのは十一月九日だから、まだ二週間ちょっとしか経っていない。となれば、楓はまだ私が死んだことで、悲しみに暮れているかもしれないのだ。

そうであつてほしいとも思うけれど、そんな彼の姿を見るのは辛かった。

「ごめんね、楓」

今ここにはいない彼に、精一杯謝つた。

自分がどれだけ楓にとつて大切な存在だったのか、それは分からない。

けれど、幼馴染が死んで平気でいられるほど楓は薄情なやつではない。

雪がちよつとだけ強くなる中、私は当てもなく住宅街の中を歩き続けた。

それからは雪が降るたびに現世で彷徨つていた。

なんとなく、楓の姿を見るのが躊躇ためらわれて、自宅と楓の家は避けてただ移動するだけの日々。

通つていた函館せいなん西南高校、近所の公園、路地裏のカフェ、観光客でこつた返す赤レンガ倉庫、八幡坂はちまんざか、港。

どこへ行つてももちろん私の姿が見える人はほとんどいなかったが、たまに目が合う人がいた。

杖をついたおじいちゃん、観光地を訪れる外国人、まだ二十代ぐらいの女性。

目が合った気がするだけで私のことが見えていたとは限らないけれど、無意識のうちにと視線を逸らした。

あるときは、「ハンカチを落としましたよ」と実際に話しかけられた。四十代ぐらいのマスクをつけた男性だった。

「ありがとうございますっ」

お礼を言つて頭を下げる。ゆっくりと顔を上げると、男性が急に咳き込んだ。「大

「大丈夫ですか？」と声をかけることはできなかった。逃げるように、その場から立ち去る。彼は私のことを無礼な人間だと思っただろう。

でも、できないのだ。

この人が、もうすぐ死んでしまうのだとしたら……

そう考えると、私の姿が見える人と積極的に関わりたいとは思えなくなってしまう。「どうして私は神様になって現世に戻ってきたんだろう」

八十神さんには使命があると言われていたが、それ以前にどうして自分が選ばれたのか、ふと疑問に思う。

不慮の事故で死んだという事実を受け入れたくない自分がいた。

大切な人の今後を、見守りたいと思う自分がいた。

だけど今の私は、楓の姿を見ることもできず、ただ雪の中を彷徨う地縛霊のようだった。

十二月になったことはなんとなく感じていた。

雪の降る頻度が増えて、現世に行ける時間が増えた。

私の意思とは関係なしに、私は函館の街を彷徨い続ける。

十二月半ば、私がこの世を去ってから一ヶ月が過ぎた。

「そろそろお母さん、立ち直ったかな」

一ヶ月やそこらで、という気持ちと、どうか前を向いて生きてほしいという願いがごちゃごちゃになっている。久しぶりに自宅へ行こうと決意して、住宅街を歩いていく。

家族の様子を見ることができたら、もういいのかもしれない。

八十神さんに頼んで神様の力をなくしてもらおう。

そんなことができるのか分らないけれど、頼んでみようと思う。

誰かの悲しんでいる姿を見るのも、これ以上、自分が悲しい気持ちになるのも嫌だから。

久しぶりに自宅に帰ると、当たり前だけど変わらずに家族団欒だんらんの場があることにほっとする。平日の夕方なので、お母さんと柚葉は家にいる時間帯だ。お父さんはまだ仕事から帰ってきていないだろうけれど、二人の姿を見られればそれだけで安心できる。

今の私は触れるのも、すり抜けるのも自由な体だ。

鍵を持っていただけ、それはポケットにしまったまま、扉に触れる。

そして雪が舞う中、泥に埋もれるように家の中へ――

そのとき、不意に自分を呼ぶ誰かの声が響いた。

「……朝葉？」

心臓が跳ね上がった。

聞き覚えのある男の子の声。

目の前の存在を疑って不思議そうな色を帯び、けれどまっすぐに私の背中へとぶつ
けられた声。

毎日のように聞いてきた、大切な人の懐かしい声。

いつでも味方でいてくれて、喧嘩してもちゃんと向き合って仲なおりました人の。

彼は私のヒーローだった。

もうとつくに止まっているはずの心臓がバクバクと鳴って、扉の中に入ろうとして
いた身体をぴたりと止めた。

「楓……」

「朝葉、本当に、朝葉なのか……？」

楓の声が震え、信じられないというように私の名前を繰り返した。

ゆっくりと振り返った先に若宮楓の姿を認めて、いろんな感情が込み上げた。

赤と青と黄色と緑と。絵の具をぐちゃぐちゃに混ぜてやがて黒くなるように、心が
どんどん塗りつぶされていく。

楓に会えて嬉しい、という感情はもちろんあった。

でもそれ以上に、苦しい。

「楓」

どうしてあなたがそこにいるの。

今日は部活ではないの。

どうして私のことが、見えるの——

「これ、夢じゃないよな？ いや、夢か。だって朝葉がこんなところにいるはず
ない」

口では否定しつつも、驚愕と喜びに滲んでいく彼の表情が脳裏に焼き付けられる。

「ははっ、夢か、幽霊か。それでもいいや。朝葉に会えたなら」

昔から子犬のように愛くるしいと思っていた笑みをニッと浮かべて、私を捉えて離
さないきみは。

もうすぐ死んでしまう存在なのだと分かって。

込み上げてくる涙が、凍りついて雪になってしまえばよかった。

第二章 きみを失いそうになった日

「朝葉、もしかしてお前、本当は死んでなかった？俺、朝葉の葬式に出られなかったんだ。気持ちの整理がつけられなくてさ。だからなんとなく、朝葉が死んだことを実感できなくて」

「そ、そうだよ。急に死んだなんて、私も正直——」

蛇口から水が飛び出すように語り出す楓は、私の言葉など聞こえていないかのよう

に続ける。
「もしかしてまだ生きてるんじゃないかって思った。今、こうして目の前にお前が現れて、確信に変わったよ」

「いや、楓、私はその……」

夢でもいいから会えて嬉しい。

驚きから喜びへと変わっていった楓の表情をまじまじと見ていると、彼が私のままの私を受け入れてくれていている気がして、逆に私のほうが困惑してしまふ。

そんな私の戸惑いを見透かしたかのように、彼は「分かっているよ」と頷く。

立ち読みサンプル
はここまで

「幽霊なんだろう？ はは、さすがに死んだのが冗談だっていうのはあり得ないよなあ」

彼なりに、私という存在をどうにか理解しようとしてくれているのだと分かった。

今の私に名前をつけるなら、そう、幽霊だ。誰も決して、神様だなんて思わない。私はただの人間。十七歳で命を失ってしまった、解けていく雪のようにあやふやな存在だ。

「そう、なの。幽霊。気づいたら街を彷徨ってて、自分でもびっくりした。まだ心の整理もついてないの。驚かせてごめんね？」

咄嗟に口をついて出た嘘を、楓はすんなりと受け入れてくれた様子で「そっか。そうだよなあ」と頷いてみせた。

「いやあ、そりゃびっくりするよな。自分が幽霊になったら。死んだことに気づいてなかったってやつ？」

「……うん。気づかなかった。今の今まで」

「だろうな。朝葉は昔からぼーっとしているとこがあるから。おとぼけさんだな」
ははは、とこの不思議な再会を笑ってみせる楓。

あまりにも普通じゃない。

死んだはずの幼馴染が目の前に幽霊として現れて、こんなふうに冗談みたいに笑え